

永久不変の軟調2番

私が入門した当初、大手メーカーさんで安定してロッドやリールがどこでも入手できる国産メーカーと言えば、ダイワさんの「ファントム」シリーズだった。

ジュニアに始まり、ハーレー、アモルファスウイスキー、イルミネーターなど、そしてその後に出された「シルバークリーク」・・・若き日の私の釣りを支えてくれたロッド達が思い出される。

正直、投げ釣りやルアー時代は、大手メーカーと言えばダイワさんも嫌いではなかったが、個人的には断然シマノさんだった。

ところが、ダイワさんが色々とフライ用品を繰り出してくるにも係らず、シマノさんはサッパリその胎動すら伺えない。

何時の頃からか、シマノさんはフライ用品を扱う気がないと考え、殆ど忘れ去られたメーカーになっていた。

そのシマノさんが、突如フライロッドとリールを送り出してきた。

【フリーストーン】・・・

今ではどなたでもご存知のブランドであろう。

「あっ！・・・シマノやん！・・・遂に出しよったんや！・・・今頃（笑）」

【飛ばせる低番手、管理釣り場でもしるい！】とか何とか書かれたシッテルが貼られてある。

価格帯も一般的なエントリーモデル並で、青銀色のアルミケースに入ったこのブランドの中核を成すと思われたモデルもあったが、何分遅れて参入してきたメーカーでもあり、何よりも技術的ファクターを前面に押し出すシマノさんである。



「今まで（ルアーロッドと投げ竿）と同じやったら、コイツ（エントリーモデル）で充分やー！」

そして、【飛ばせる・・・】と言う能書きが、これまで私が抱くシマノ・イメージにぴったりハマリ、数日後にはすっかり手元に転がり込んでいた。FREESTONE FV864 8フィート半の#4ロッド・・・やはり使用すると流石に優れたものには違いなく、グリップの太さやリールシートなどは首を傾げたくなるころもあったが、この価格帯のロッドでは主性能に目を見張るものがあったと記憶する。

しかし、このシリーズの真髄を知るのは・・・
その後購入したもう一本のロッドであった。



この頃になると、溪流でもロングリーダーやルースニングと言う言葉が巷を賑わす様になり、それまで讃えられていたハイスピード・ハイラインやウエスタン・アクション等々の言葉は湖水の釣りを除けば、段々と勢いを失って影を潜めて行った記憶がある。

かつて7フィート半の#5が渓釣りの中心とされた時代から、8フィート強の#3の軟調低番手が注目を浴びる時代になっていた。

そうになると、溪流をメインフィールドとしている私もそれなりに気になってくる。

そこで、あくまでも硬めのドライフライアクションが主軸であるが、お試しに8フィート強#3軟調ロッドの購入に踏み切った。

当然、いきなり奮発して後悔するのも嫌なので、それらしいエントリーモデルで様子見をするのが無難である。

すると既に手持ちの【飛ばせる・・・】と言うレットルが貼られたロッドの脇に・・・

【・・・ロングリーダー自在・・・】とか何とか書かれたレットルが貼られたフリーストーンが立て掛っている。

「シマンノが柔らかいロッド作るかあ?・・・」

・・・これまでのシマンノイメージでは想像がつかない。

袋から出してその場で継いで見ると、確かに柔らかい・・・と言うかポテンポテンである。

「確かに柔らかいけど・・・大丈夫なんか?・・・こんなんで・・・そやけど、この値段じゃコイツが一番それらしいかな?」

ロングリーダーなど真面目にやったこともないのに、その時はその様に思えた。

察するに【ロングリーダー・・・】とキツパリと記されたレットルに洗脳された先入観が支配的で・・・これが単純に決め手になったと思われる。斯くして、私のフライロッドに初めて軟調スローアクションのロッドが加わった。

FREESTONE FV833 8フィート強の#3・・・

そして家に持ち帰り、他のロッドと並べて見た瞬間・・・愕然とすることになる。

「なっ・・・なっ・・・なんじゃあ?・・・この・・・バット・・・!・・・」

他のロッドに比べると、ティップはそれほど変わらないがバットは目を疑うほど細い・・・

「ほっくそあー!」

それも・・・感覚的に限界を超えた様な細さである。

「大丈夫なんか?こんなんで?・・・こりゃあ〜ヤワイ(弱い)竿やで・・・きつと・・・何かあったら一発でおシヤカやな!」

目を疑う様な極細ロッド・・・

おそろしくこのロッドをお持ちの方は、大同小異この様にお感してあろう。「やっぱりシマンノやなあ〜・・・技術があるんは分かるけど、なんもこれ見よがしに「コ」まで細せんでもエエんちゃうん?」

しかし、この価格帯でよくも「コ」まで作れたものだ・・・と感心させられたのも事実である。

そしていよいよ実釣で試す日が訪れた。

ダブルティーパー#3のラインが通されたコイツを持って溪に降りた。

「大丈夫かい・・・(前に)構えただけで(ロッド)曲がってるし!」

そしてラインを引き出してキャストを開始した。

「?」(バック)

「??」(フォワード)

「???」(バック)

「ちょあゝ待て!・・・なんじゃコシ?・・・ちょあゝもっぺん(もう一回)ー!」

「?」(グワァン)

「??」(グワァン)

「???」(ドォロワァン)

「待て待て待て!・・・ダルい竿やのあゝ・・・どないして投げんねん?」

それからも四苦八苦しながらトライしたが、全く釣り以前の問題である。

キャストしたらラインはグチャグチャ・・・しかも毛鉤は何処に落ちるか

わからない・・・それでもライン先端より前方に落ちるならまだよいが、

話にならない程ライン先端よりも遙か手前に落ちてしまう・・・

まったくリーダーがターンしてくれない。

「アッカーン!・・・こんな使われへんし!」

その日は諦めていつものドライフライアクションを持ち出し、憂々晴ら

しの様に釣り上がって行った。

それからも何度か試してみたが、結果は殆ど同じだった。

当時好んで使用していたロッドはミディアムファーストで我慢してもミ

ディアムまで・・・誤って手に入れたミディアムスローはトロ臭くて御蔵

入りにされていた状況であるが故、これも考えてみれば当然である。

しかし、葦が生い茂るポイントでリーダー+数十センチのラインを出し

てダッピングをやるにはそれなりに他の竿よりもやり易かった。

「ダッピングは楽やな・・・そやけどこれやるんやったらニンフロッド(107インチ)でエエし!」

ところが、このダッピングをやってる時に・・・とあることに気が付いた。

数十センチしかラインが出ていないにも係らず、軽く送り込む様に振れ

ばリーダーがゆっくりリターンしてフライが落ちる。

これがヒントになり、ラインを段階的に長くして行きながら、リーダー

のターンに注意してキャストイングの練習を積み重ね、なんとか釣りがで

きる所まで漕ぎつけた。

この時、リーダーを長くすると、またはスロースピードでキャストする

場合、毛鉤の空気抵抗と自重に大きく影響を受けることを学んだ気がする。

そして翌シーズンから本格的に

この軟調ロッドに取り組んだ。

ロングリーダー対応なのでロン

グリーダーが必要不可欠と考え

ていたが、なんのことはない・・・

9フィート前後に詰めればライ

トケイヒルでも投じることがで

きた。

結局はチョットしたタイミング

と、手首の使い方にコツがあるだ

けだろうが、この時はこれさえも

理解できずに体で覚えて行った。



ある時、いつもの釣り具量販店に行く。とラインコーナーのシュープリーム2の陳列棚に1個だけロッドを見つけた。

当時としては量販店で#2ラインを見るのは非常に珍しく、店員さんに聞くと誤入荷らしかった。

「もしかしたら、アイツに#2掛けたら・・・もっと上手いこと行くんちゃうか？」

そう考えるや否や、素早くカゴにほり込んで、当時酷使していたダイキャストの小型リールもついでに追加購入し、初めて#2ラインを巻いたリールを準備した。

コイツを装着してキャストした途端・・・心地よい・・・この上なく心地よい・・・もろく最高の気分だった。

#3で違和感を感じていた「振ってる最中にグリップの中までひん曲がる感」も消え、若干トルク不足に感じた点が、柔らかい割に復元が早い私好みのロッドになっていた。



確かに落差が多い山溪流や障害の多い源流域では使っ気になれなかったが、平瀬や「ゆったりした瀬」が続く落差の少ない溪相や、里川では群を抜いて使用頻度が高まった。

更に、これをミッジのライズハントに持ち込んだ瞬間・・・それまでが嘘の様に楽しさも倍増した。

また、イマージングでも扱い易く、大物が掛っても素早くバットに乗って一定のテンションを保持したままティップはどこまでも魚の動きに追随し、非常にバシにくいロッドであることもわかってきた。

そして遂に・・・溪流のみならず管理釣り場にも持ちだされる引っ張り所となった頃・・・

最初の事故が起こる。

近郊の管理釣り場・・・風が若干強い日であった・・・

ティップにラインが螺旋状にまとわりつき、解すつもりでロッドをひねりながら無造作にラインを引いた途端・・・

【ボキッ！】・・・鈍い音がしてティップが折れた。

「はっ！・・・あゝ・・・折ってもあゝた！」

1年間の補償期間はとくに過ぎていてる。

他の竿に買い直すことも考えたが、漸くココまで漕ぎつけた過程を顧みると、他のロッドに乗り換える気分にはなれなかった。

それだけ、このロッドの真髄にぞっこん惚れ込んでしまったと言える。

已む無くティップを取り寄せて、再び歓喜をもたらす竿となってくれた。

そして、今度は溪流で・・・

またもや悲劇が起こる。



ロッドを車に立て掛けて昼食を済ませ、立ち上がった途端にスパッツの金具が反対側のシューズの紐に引っ掛かった。

バランスを失った私は車に体当たりしながら、「倒れてはなるまいー」とスッ飛び様にケンケンで体勢を立て直した途端……

【バキッ！】……乾いた音がしてティップが顔に当り、ラインが纏わりついた。

恐る恐る足元を見ると、グリップの先から伸びたバットが靴の内側の下に続いている。

そして靴の外側からはその先にあるロッドがティップに向かって伸びているが、それはとても直線的な状況ではなかった。

「あつりゃあ？…折れたん？…ああやってもおくら！」

その昔、購入時に……

「こりゃあ〜ヤワイ(弱い)竿やで…きつと…何かあったら一発でおシヤカヤな！」

……と思った【何か】が、まさか自分の踏みつけであろうとは、思いもよらなかつた。

さて、なんとかしなければならぬ。

当然、腹立たしいが迷いはなかった。

私「FS33のバット頼んでほしいねんけど……」

店「はい……これに住所とお名前を記入してください。」

私「前にティップ折った竿や…アホみたいやで！」

店「(苦笑)」

私「新品買っさかい……こないだ買おうたティップ引き取ってくれる？」

店「いやいや……それは無理です。」

私「そりゃそうやな……」

私「(まとも)に答えんとボケんかい！……ワシ……クレーマーちゃうし！」

店「すいません(笑)。でもこのロッド、エエんでしょね……売れ行き

ダントツですもん……」

私「そうなん？」

店「うちらフライのお客さんはやっぱり少ないですよ！……小物は売れてもロッドは殆ど売れないっす！……そやけど、これは一時期結構出ましたわ！……まあ、フライロッドの中では……ですけど、やっぱり他と違いますぅ〜？」

私「こつこつ癖あるけど……ハマったら他を考える気い〜にはならんな？……そやけどFS(もう一つ上のシリーズ)の方が出るやろあ？」

店「出ません！……FSの中では同じ833は少しマシですけど、EVが一番で特にこの833はダントツです。」

私「そうなんや(笑)……」

店「入ったら電話差し上げますんで……」

こうして、購入時のロッドケースと布袋はそのまま、ロッドだけがすっかり入れ替わってしまった。

「ああああ。もう一本買おうとしたりよかった!。なんでバラ買いしたら新品より高おつくねん!。ホンマ」

こんな再購入は最悪としか言い様がない。

しかし、そこまでしてもこのロッドに拘ったのは、ぞっこん惚れ込んでいる証でもあるう。

そして今でもこの想いは変わらず。

私にとって永久不変の8フィート3インチ#2ロッドとなっている。

・・・???

(メーカー指定は#3ですけど?。。。。って?)

そんなことは、私にとってどあうでもよい!

私は絶対#2でしか使用しない!

シマンさんには悪いが私が決めた!

。。。だが、私にとって最高の竿であることは疑う余地がない。

FREESTONE FV833 8フィート3インチ。。。3番指定の2番ロッド。。。



あどがき

ここまでぞっこん惚れ込んだ竿も色々使った中で数本にも満たない。。。その中の一本である。

この様な竿は一目惚れが未だ続いて。。。今に至って居る物もあるが、一目惚れは、時が立つにつれて飽きが来る事が多く、すべてがこの様な域に至るとは限らないと考えている。

ところが最初の段階で疑問符を投げかけた竿が、豹変する様に気を惹いて来ると。。。憑かれた様に惚れ込んで、他の竿を考えようとはしない。

この辺り。。。浮世の何某かにそっくりではなからうか?(笑)

斯くしてこの8フィート強の#2。。。初めて手にした軟調ロッドも、拙いハッポコ釣り師の私を虜にしました。

だが、やはり不慮の事故等で、終焉となる不安が付きまとう。

結局、保険でこのシリーズのハイエンド。。。Xを購入に踏み切り、万一の代替に備えることにしたが、考えてみればおかしなモンである。

普通ならハイエンドモデル在りきでエントリーモデルが代替となる。。。るのであるが、私の場合は全く逆と言えよう。。。

別にXを温存していた訳ではなへ、よく自然にロV在りきでXが代替の感覚であった。

そして今、幸運にもロVは急災である。

昨今、釣り仲間の車も小型化したのが為、考え方を変えた。

毎回では行かないまでも、携帯面で優れるXをを比動させて。。。

竿として大切にしたいロVを温存するに決めた。

そのへん。。。のGプレバ下商品開発に係わられた方々の意に反して。。。私はこのエントリーモデルが非常に気に入っている。